

毎日の授業や子どもとの接し方に悩む若い先生たち。
こんな小さなきっかけから子どもが変わります。

言葉に責任を持つ

京都女子大学教授 吉永 幸司^{よしなが こうし}

国語の授業で大事なことのひとつに、「言葉に責任を持つ」を考えています。子どもにとって国語の授業は、算数や体育のように「できた」「できない」が具体的な形で見えてこないのです。何となく始まり終わると思っている子がきつと多いことでしょう。国語の授業は言葉の学習であるということをしっかりと意識させるために、子どもが使っている言葉、教師が指導している言葉を大事にしようという気持ちが大切です。

1 自分の言葉で表現する子どもを育てる。

「言葉に責任を持つ」というと特別な響きがありますが、それほど難しいことを求めているわけではありません。名前を呼ばれたら「はい。」と返事をする、発問に対して答える、わからないことはわからないこと、理由が言える、ノートは正しく丁寧な文字を書く、ということが国語学習の基本です。これが、自分の言葉に責任を持つとい

うことです。それくらいは簡単と思えるのですが、なかなか手強い内容もあります。

例えば、

「わかった人は手を挙げなさい。」

という簡単な指示に対して、挙手をする子が学年を追って少なくなる。話し合いでよい発言を聞いても、そのよさを友達に伝えようとはしない等、言葉を通して言葉の学習を深めるのが国語の授業なのに、いつのまにかその自覚が希薄になっているのです。

言葉に責任を持つということ、自分の言葉で自分を表現する」と置き換えるとわかりやすくなります。

若い頃、次のような授業を参観したことがあります。読解が主な学習活動でした。

最初に指名をされた子が自分の考えを述べ、続いて次の子が「同じです。」と言ったのです。先生は、その発言を取り上げ、

「同じ」ことでも自分の言葉でお話しなさい。それが国語の勉強です。」

と指導をしたのです。この時の様子が

授業が終わってから、

「よいことを考えていたのに、当てられなかったのはどうしてですか。後で当てると言ったら、当ててもらえると思っていたのに。何回も手を挙げていたんだよ。」

授業後、いかにも残念そうに伝えにきました。山下君は、自分の考えを発表しようと考え、よい考えを思いつき、教師の姿を追っていたでしょう。申し訳ない気持ちになりました。きつと「先生は嘘を言った。」と知っているだろうと、その時間を悔いたものです。子どもは、教師を見て育つものです。

板書が丁寧な先生に指導を受けた学級の子は、ノートの文字が丁寧です。話し方が穏やかな学級は、担任の先生が穏やかな話し方をされています。教師の言葉を嘘と思わせないようにすることの大切さを感じた授業でした。このことが教訓になって、その後は、自分が話す言葉がどのように子どもに届いているかについて、気にしながら授業をするようになりました。

これだけではありません。原稿用紙

を配り、

「何でもよいから書きなさい。」

と指示をしたのに、期待通りでないと

「もう少し詳しく書きなさい。」

と注文をつけている自分の姿があります。

「間違ってもよいから発表しなさい。」

「わからない人は手を挙げなさい。」

と指示した時、発表や挙手をした子に対して

「しっかりと聞いていないか。」

と注意をしていることを反省しました。これでは先生も嘘をついていると言われても仕方がないと思ったからです。

教師に余裕がないと、やたらと喋ってしまいます。教材研究が浅いと、子どもの発言を聞く余裕がなくなり、子どもの気持ちと距離をとってしまいます。言葉を大事にしている姿を見せる教師になってほしいと強く願っています。

2 教師の言葉を嘘と思わせないようにする。

「言葉に責任を持つ」ということを、子どもに求めますが、それ以上に教師が自覚しなければならないと思う出来事がありました。

ある授業で、何人が発言した後、山下君（仮名）に指名をしました。山下君は何かを答えようとしたのですが、適切な言葉が出てこないで、黙っているだけでした。時間の節約をしたいこともあって、

「後で当てるから考えておいてね。」

と、指示をして授業を進めました。その後、後で答えてもらうと言ったことも、山下君がその時間どうしていたかもすっかり忘れていました。ところが、